

# 子育て支援プログラムに関する一考察

## —学生の見点からの現状と課題—

杉 山 喜美恵 (教育方法)

### はじめに

子育て支援関連のイベントや活動は、地域、幼稚園、保育所、図書館、行政など多くの機関が、対象、内容、形態は多様であるが、何らかの形でおこなっている。

そのような社会情勢をうけて、保育士にも国家資格化に伴い、「子育てを支援する能力」が求められるようになり、平成18年10月1日からスタートした「認定こども園」の認定基準には、「地域における子育て支援をおこなう機能」<sup>(1)</sup>が掲げられている。子育て支援については、段階はいろいろあるとしてもこれからの社会の中ではもはや欠くべからざるものとして位置づけられている。

しかしながら、養成課程では、「子育てを支援する能力育成」に関して、十分な指導がなされているとはいえないであろう。特に2年間で養成をおこなう短期大学では、十分な時間をあてることは難しい。そういった苦しい現状については保育士養成協議会や保育学会などの分科会、研究発表の中でもうかがい知ることができる。

多くの養成校が、いかにして「子育て支援能力の育成」をおこなっていくか試行錯誤をくりかえしている。

そのような状況下、筆者は、「保育総合演習」という科目の中で、なるべく多くの機会、「子育て支援」にかかわれるよう試みてきた。後述する親子ふれあい教室には5年間、携わらせていただいている。

その中で、養成機関における子育て支援プログラムのあり方とはどのようなものかということを考えるようになった。さまざまな機関が主催して子育て支援活動が行われているのだが、それらは競合して親子を取り合うのではなく、それぞれが補い合って地域の中ですみわけし、

よりよい子育て支援活動を展開していくことが望まれている。

それでは、養成機関が行う子育て支援活動の特徴は何か？まずあげられるのは学び手である学生の存在である。そして幼児教育という専門教育を行っている場、すなわち幼児教育のプロが集う場である。

そのような場がかかわる子育て支援プログラムの参加者は、何を期待してこのプログラムに参加しようと考えたのか、すなわち高等教育機関がかかわるプログラムに参加者は何を求めているのか。

そして、こういった子育て支援プログラムに参加することによって、学生にはどのような育ちがみられるのか、この二点を明らかにすることが養成機関の子育て支援活動を考えていく上で必要となるのではないかと。

前者については、昨年度の保育学会で子育て支援プログラムの現状と問題点について、参加者に対する調査を行い、その結果について発表<sup>(2)</sup>を行った。

子育て支援プログラムに参加する目的は、参加者の子どもの年齢が低い場合には、親自身の友達を作り、いろいろと情報交換することであり、比較的参加者の子どもの年齢が高い場合には、プログラムの内容そのものに対する興味や同じ年齢の子どもとあそびたいという子どもの友達(当日のみであっても)づくりであることがわかった。

短大が主催するプログラムということに対しては、環境構成や他の機関とは違ったあそびが提供されることに対する期待がある。さらに、多くの学生が参加することによって、決め細やかな対応がなされることに対して高く評価された。やはり、参加者は、高等教育機関である短期大学がかかわるプログラムに他の主催するプ

プログラムとは異なった期待を持っていることがうかがえる。

そこで、今回は二つ目の課題である「プログラム参加における学生の育ち」という観点について論じてみたいと考えている。「育ち」というものをどのようにとらえるか、ということが問題となるが「育ち」は参加するプログラムの形態や内容によっても異なるであろうと推測される。

そこで、第一段階として、われわれが5年間かかわってきたながら親子ふれあい教室と平成16年度後期より始まったあそびの森という二種類のプログラムをとりあげ考察をおこなっていくと思う。

両者はともに提供型プログラムであるが、主催者が地域と高等教育機関という違いがある。また、前者は全プログラム通して同じ参加者であるのに対し、後者は1回、1回参加者が異なっている。このような違いはあるが、どちらも学生の側からみれば、1回のプログラムを企画し、進行していくということでは共通している。

したがって、今回は、「提供型のプログラムの企画、進行における学生の育ちを明らかにする」とことを目的とする。

## I. プログラムの概要

最初に、今回、調査に関係した子育て支援プログラムの概要について述べる。プログラムはながら親子ふれあい教室とあそびの森の二つである。

### 1. ながら親子ふれあい教室

「親子ふれあい教室」は、岐阜市青少年育成市民会議が推進する事業の一つであり、「家庭の教育的役割を認識し、その充実と向上を図る」目的で開催されるものである。

岐阜市の青少年育成市民会議は、50地域の単位市民会議によって組織されており、そのほとんどで親子ふれあい教室が開催されている。それぞれの地区に住む0～1歳児を持つ親子を対象にその地区が計画したさまざまな講座を提供している。

ながら親子ふれあい教室は、岐阜市の北より

にある長良地区の青少年育成市民会議が主催するものである。長良地区の場合は、平成18年度で第12回を数え、参加者の中からは次の地域子育て支援の核となる人材が育ってきている。毎年、9月から12月の間に10回のプログラムが準備されている。平成16年度のプログラムを例としてあげる(表1)。

表1. ながらふれあい親子教室プログラム  
(平成16年度)

回	テーマ	回	テーマ
1	始めましてパーティ	6	保育園ってどんなところ?
2	児童センターで遊ぼう	7	体にやさしいおやつを作ろう
3	お医者さんの話を聞こう	8	楽しい絵本に会いたいな
4	赤ちゃんと一緒にシェイプアップ?	9	学生さんと一緒に活動
5	乳幼児の救急救命	10	ちょっと早いクリスマスパーティー

この親子ふれあい教室は、10回のプログラムを同じメンバーで体験するようになっている。10回のプログラム終了後は、自主クラブへの移行を目指しており、いずれは地区の育成会を運営していく人材の育成につなげていきたいと考えられている。

10回のプログラムの中で、1回はわれわれのゼミが企画し、運営する機会を与えていただいている。今回の場合、プログラムNo. 9の「学生さんと一緒に活動<sup>(3)</sup>」というのがそれに該当する。

### 2. あそびの森

あそびの森は、平成16年度後期より、「子育て親育ち・学生の心の育成」という理念のもと、毎月、1、2回土曜日に東海女子短期大学の保育実習室を利用して、主として幼児教育専攻の教員が個々の専門分野を生かしながら、未就学児の子どもとその親にあそびを提供するものである<sup>(4)</sup>。

平成16年度と17年度のタイトルを表2、表3に示す。

表2. 平成16年度プログラムタイトル

回	あそび	回	あそび
1	新聞やぶり手遊び	5	親子で作るペーパークラフト
2	スタンプシアー	6	紙芝居うちわでサーキット
3	クリスマス会	7	音楽絵本
4	森のおんがく家		

表3. 平成17年度プログラムタイトル

回	あそび	回	あそび
1	新聞あそび	6	うたっておどってレッツゴー みーちゃんのおはなし
2	子育てに関する懇話会(親) お話しの世界で遊ぼう	7	でいきるかな?あたるかな
3	英語であそぼうピンポンパン 世界の遊び	8	クリスマス会
4	親子で作るペーパークラフト	9	つくって鳴らそう
5	子育てに関する懇話会(親) 小麦粉粘土遊び(子)	10	粘土遊びのクッキー作り

平成16年度のプログラムではNo. 3のクリスマス会が、平成17年度のプログラムでは、No. 2のお話の世界であそぼうとNo. 8のクリスマス会が該当する<sup>(5)</sup>。

## II. 調査概要

学生の育ちを明確に捉えることができたならば、単に活動に参加させるだけでなく、その育ちをより深めていくためにどのような指導をしていくべきか、数少ない参加機会を最大限に生かすための指導方法、内容がおのずと構築されていくと考える。

そのために、今回は、以下の方法で分析を試みた。

- ①レポート課題の分析
- ②質問紙調査の分析

①については、プログラムに参加した学生に「子育て支援活動に参加して」という大きなテーマでのレポートを課し、学生がこのようなプログラムに参加した場合、どのような点に着目し

て記述しているかを分析することにより、学生が重要視するポイントを明らかにすることを試みた。

分析対象者は、東海女子短大幼児教育専攻、杉山ゼミの平成15年度入学生19名、平成16年度入学生19名の計38名である。

レポート対象プログラムは前述のながら親子ふれあい教室およびあそびの森のクリスマス会である。

分析対象者の参加プログラムは図1に示すとおりである。

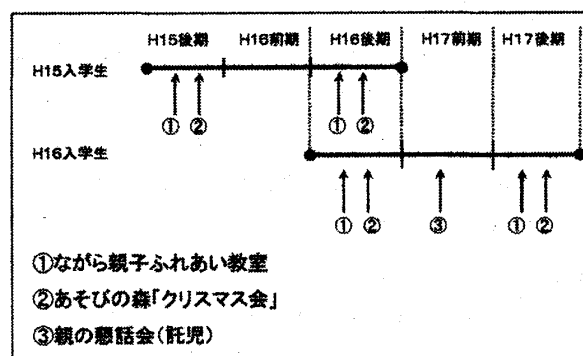


図1. 調査対象者の参加プログラム

## III. 結果および考察

レポートをまとめた結果、記述項目は以下の5点にまとめられた。

- ①経験と観察
- ②プログラム企画に関する配慮
- ③子どもの発達や親子のコミュニケーションに対する学び
- ④子育て支援プログラムの意義の把握
- ⑤次世代の親としての認識

以下に、それぞれの項目について記述を引用しながら述べていく。

①の経験と観察ということだが、2年生にとっては2回目の参加となり、レポートにもそのことに関する記述が多くみられた。レポート内容の引用は、表現に不適切な箇所が見られる場合もあるが、原則として原文どおりとした。

・2回目なので子どもの目線になって準備できた。年齢にあった企画を考えることができた。

去年の反省を活かしてできた気がした。

・親にも声をかけられるようになった。子どもや母親の様子をみる余裕があった。流れがわかり、緊張しなかった。

前回はまかせきりだったが、今回は自分から提案したり、工夫したりしてやることができ、自分たちで責任を持って最後までやれたことで自信にもつながったという記述もみられ、回数を重ねることで余裕をもって企画運営に当たれるようになり、このような経験を重ねていくことの重要性がわかった。このことは2年生のほとんどの学生が言及していた。

1年生は「今まで子どもと接する機会が少なかったので今回はじめは全然子どもたちに入っていけず、声もかけられなかったのですが、2年生の先輩が自然と子どもたちのなかに入っているのを見て自分から声をかけて一緒に遊ぶことができました。2年生の先輩はもう実習とかも行っているの子どもたちに対しての接し方もわかっていて声かけもすごく自然で隣でみていてとても勉強になりました。」とあるようにまだこの時点では1年生は実習も未経験なため、なかなか積極的に子どもの中へ入っていけないが、2年生を見ることによってそのやり方を学ぶことができたようである。

このように2年生は経験を重ねることによって自信がまし、1年生はそれをみて子どもや親への接し方を学ぶという双方にとってよい効果を与えたことがわかる。

②のイベント企画に関する配慮についても1、2年ほとんどの学生がふれていたが、具体的には、やはり安全性を第一に考えなければならぬということ、湿度や温度への配慮、子どもが楽しめる企画にすることなどこういったプログラムを企画する上で大切なことを実感として感じ取ったことがわかった。

③の子どもの発達や親子のコミュニケーションに対する学びとしては、1年生はもちろんのこと、2年生も実習ではなかなか未満児と触れ合うことがなかったこと、また、実習では体験できない親子というものと対峙することができたことを評価する学生が多かった。

代表的な記述を取り上げてみると、「このプロ

グラムで実習とは違い、親と接する事ができました。いろいろな親子をみて、家庭でも親が子どもにこういう話し方をしているんだなと思ったり、こういう接し方、援助をしているんだなと知る事ができました」と記述されていた。

国家資格化に伴い、保育士には従来以上に子育て支援の能力が求められるようになったが、なかなかそれを目的とした学習の機会は得がたく、こういったプログラムに参加することは非常に有意義であると考えらる。

また、具体的な遊びに関しての記述では、あそびとしてボーリングを企画したが、子どもがボーリングをボーリングとして楽しまず、マラカスのようにふったり、つりを企画したグループが本来のつりという遊び方とは異なる手づかみや口に入れてしまうという状態を見て、「始めのうちは違うのに・・・という気持ちでしたが、だんだんこんな遊び方もあったのかあ、このぐらいの歳の子はこうするんだと思うようになりました」とあるように実際の子どもの姿を見ることにより、大人の常識を持って見るのではなく、ありのままの子どもを受け入れるという視点を持つことができるようになるということがわかった。

④の子育て支援プログラムの意義の把握については、こういったプログラムの重要性をほとんどの学生が感じていた。そして、同時に、「自分が母親になったときにこういった子育て支援イベントに参加して子ども同士のふれあいを試したり、自分も他の親さんの話を聞いたりして子どもと一緒に色々な経験をしていきたいなと思った」とあるように、親としての自分というビジョンをもつことができ、⑤であげた最近希薄となってきた親になることへの意識を改めて認識させるよい機会にできたと考えている。

## 2. 質問紙調査の分析

1. での結果は、親子ふれあい教室およびクリスマス会という限定されたプログラムにおけるレポート記述をまとめた結果である。そこで、より広汎性を持たせるために、他のプログラムに参加した学生もふくめて、実習前にこのような子育て支援プログラムに参加することの効果について調べるために、平成17年度入学生134

名に対し、以下の内容で調査をおこなった。

①あそびの森のどのようなプログラムに参加したか

②どのような役割を担ったか

③自分にプラスになった点

④実習で役にたった点

その中から、③の自分にプラスになった点という項目をとりあげ、あそびの森に参加した78名の回答をまとめた。それを記述の多かった順に以下に示す。( )内は記述のあった人数である。

- ・初めて会う子にどう接するか遊びに参加しない子をどう誘うか、先輩の接し方を考えながら行動できた(14)
- ・子どもと遊ぶ楽しさを知ることができた(10)
- ・実習前なので子どもと接することがどうしたことか知ることができて心構えができた(8)
- ・実習前なので全く子どものことがわからなかったが、子どもの動き、行動を知ることができた(8)
- ・親子関係を見ることができた(親の子に対することばがけ) (7)
- ・子どもにどのように接するか(関わり方・乳児のあやし方) がわかった(6)
- ・子どもの前にでてやるという経験ができた(恥ずかしくなくなった) (5)
- ・先輩がどのように企画して進めていくか見ることができた(5)
- ・保護者と話をすることができた(4)
- ・どのように子どもとコミュニケーションをとったらよいかがわかった(4)
- ・同年齢の子どもでもいろいろな子どもがいることがわかった(3)
- ・子どもが興味をもつ遊びを知ることができた(3)
- ・先輩の子どもたちへの語り方を学ぶことができた(3)
- ・保育士になりたいとの願いが強くなった(3)
- ・親と一緒にいる子とどう関わることがわかった(3)
- ・子どもたちと会話することができるようになった(声かけ) (2)
- ・あそびの中の危険に気づいた(2)

滑り台から落ちる/そりでぶつかってこける  
・子どもと接することができ少し積極的になれた(2)

・成長・発達の差が見られた(2)

・絵本をいっぱい読むことができた(2)

読み聞かせが得意になった/実習でスムーズにできた

・子どもがどんなことをすると笑顔になるのか知ることができた(2)

以下は、1名の記述項目である。

- ・先輩の乳児のだっこする手つきを見ることができた
- ・いろいろな性格の子に対し、接し方を考えながら行動できたこと
- ・子どもに関わることの難しさを知った
- ・手遊びを覚えられた  
自分から積極的に話しかけなければ親から離れて一緒に遊んでくれない
- ・子どもにとって母親の存在がいかに大きいか感じられた
- ・どのようなゲームがあるかわかった
- ・いつもより広い視野をもって見るようになった
- ・人との会話が自然にできるようになり、社会的になれた
- ・色々な子どもとかかわることで子どもを見る目が変わった
- ・踊る動作を伝えることの大変さがわかった
- ・小さな声で話しかけてくる子に耳をかたむけることができた
- ・保育者の存在の大切さがわかった(知らない子が仲良く遊ぶようになる)
- ・音を使ったあそびをどのように進めていくかわかった
- ・自分に自信が持てるようになった
- ・クリスマスの行事に何をしたらよいのかわかった
- ・先輩の手遊びやアンパンマン体操、パネルシアターなどを見ることができた
- ・子どもの発達段階を知ることができた

学生の記述をまとめてみると、子ども、親、そして親子を観察することから子どもの発達段階や個性、親子のコミュニケーションのとり方などを、先輩や先生から子どもへの声がけの仕方、あそびへの誘い方、抱っここの仕方などを学ぶことができる。このことから「観察」がキーワードの1つとしてあげられる。また、体験することで、実習に対する不安の軽減や、自分に自信が持てたり、子どもと遊ぶ楽しさを実感することができる。手遊びやあやとり、絵本の読み聞かせなどの技術を学べたなどにまとめられる。

以上より、子ども、親、親子、先輩などを観察すること、また、実際に参加することが、知識や技術の習得に結びついていることがわかる。技術についても、手遊びやあやとりなどのあそびだけでなく、ことばがけや接し方、援助の仕方なども含まれていた。

1. 2. の結果を概観してみると、1年生にとっては、先輩と一緒に活動するということが重要なファクターになっており、このようなイベントには同学年のみでなく、異学年で一緒に参加させていくことが有効な方法であるといえる。すなわち、先輩、先生などモデルになるべき人物が存在することが必要である。

また、学生の意識としては、このようなプログラムを自己の保育者の専門性を高めるよい機会であると捉えており、参加することにより、保育者としての専門性が高まったと感じていることがわかった。しかも、参加経験を重ねていくにしたがって、その効果は高くなっていくという図式がうかがえる(図3)

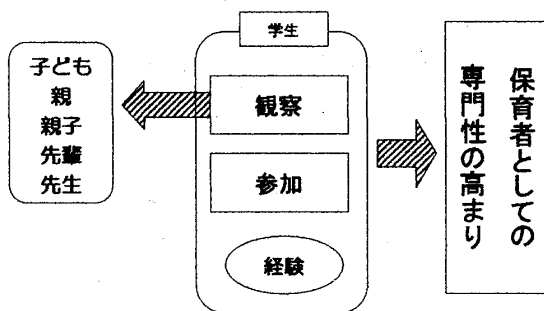


図2. 学生の子育て支援プログラム参加に対するシステム

次の課題はこの高まりを「感じた」だけでなく、より客観的に評価できるようにし、学生に具体的にフィードバックしていくことが必要であると考えている。

そのためにも、客観的な評価をどのように行っていくかが今後の課題である。

### おわりに

この数年間、子育て支援プログラムに携わってきて、学生たちが成長しているとさまざまな場面で感じてきた。自分自身、それを具体的にまた、客観的につかみきれないことにあせりをも感じていた。

ここ数年は、その「育ち」を見極めること、明らかにすることを試みてきた。今回、主に学生のレポートを分析する中で、その「育ち」が「保育者の専門性」ということとつながっているのではないかとおぼろげながら認識できたと思う。

「保育者の専門性」という定義については、いまだにさまざまな場で論議されている。ここでいうところの「保育者の専門性」とは一体どのようなことなのか。

個人的には「知識と技術をベースにした実践力」であると考えているが、今後、より具体的にできるよう調査分析をすすめていかなければならない。

そして、養成機関の子育て支援活動としては、参加者も単にあそびを提供されるという位置づけだけではなく、学生の養成にもかかわってもらいたい。地域で子どもを育て、親を育てていくと同時に、また、学生をも育てていってほしい。そのような相互作用が養成機関の子育て支援活動の特徴であると考えている。

この原稿は、日本保育学会第59回大会で発表されたものに加筆・修正したものである。

(1) 「認定子ども園の認定基準に関する国の指針」  
(全国保育士養成セミナー資料)

(2) 杉山喜美恵、「子育て支援イベントの現状と問題点」、日本保育学会第 58 回大会

(3) 平成 15 年の活動を例としてとりあげる。概要は以下のとおりである。

日時) 平成 15 年 11 月 19 日 (水)

※ 1 回の活動時間は 10:30 から 12:00 までの 90 分。

内容)

① 主催者による体操

② ペーパーサート「小さな世界」

③ グループ活動

学生が 4 グループにわかれて、それぞれのグループが親子で楽しめる活動を考えた。今回は、たこつり、キャラクターつり、ボーリング、わなげの 4 種類。

④ ティータイム

⑤ 主催者による体操

(4) 若杉雅夫・篠田美里・長谷部和子・杉山喜美恵・瀬地山葉矢、「子育て支援プログラム「子育て親育ち・学生の心の育成」—あそびの森の試み—」、東海女子短期大学紀要第 32 号、2006 年

若杉雅夫・杉山喜美恵・篠田美里・松尾良克・長谷部和子・伊藤功子・窪田千恵子・瀬地山葉矢、「子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈1〉」、東海女子短期大学紀要第 32 号、2006 年

(5) 平成 16 年度のクリスマス会については前掲書参照のこと。

平成 17 年度については以下のとおり。

日時) 平成 17 年 12 月 10 日 (土)

10:00 ~ 12:00、13:30 ~ 15:00

内容)

① オープニング(歌とおどり「あわてんぼうのサンタクロース」)

② 絵本をみよう! (『クリスマスおめでとう』ひぐち みちこ作/こぐま社)

③ オーナメントをつくろう (年齢別活動)

5・6 歳児:くるくるプレゼント、

4 歳児:パラシュートサンタ、

3 歳児:ストローサンタ、

2 歳児:ポケットツリー、

0・1 歳児:てがたサンタ

④ 歌って踊ろう(「あわてんぼうのサンタクロース」)

—児童教育学科・幼児教育専攻—